



私たち日本人は元日というものにかなりこだわってきた。大みそかまで懸命に大掃除をし、おせち料理を作り、あるいは貸し借りの精算に走り回るなど、一年の最後までとたばたとしていても、一夜明ければシンとした静かな元日を迎えることになる。

最近の様子も随分と変わってしまっているが、われわれの心の底の方にはしっかりと根付いているのではないかと思う。三百年以上豆田の町で暮らしてきたわが家にはそれなりの年越しの習慣があるが、その一つ

に先祖代々（といっても残っているのは七代前からではあるが）の掛け軸になったお絵像を床の間に掛けお参りをする習わしがある。

このお絵像を掛ける仕事はお

承

継



草野 義輔

「お絵像を掛けなさい」と長男である兄に指示し兄はぶつぶつ言いながらもこたつから出て行く、という様子を何度も見た。

早く済ませておけばよいのだが、その時間帯にその仕事をするのも何となく暗黙の了解があったような感じもしていた。

最近のわが家の長男は要領を得ていて大みそかの昼ごろまでにはさっさと片つけて涼しい顔をしている。

おむね跡取り息子の役割と決まっている。四十年ほど前は紅白歌合戦全盛のころでほとんどの家庭で家族そろって見たものがあるが、決まって盛り上がったころに父が思い出したように

古くからの伝統を継承していくのも簡単ではないが、古い家を守っていくのは外からではわからない努力が必要である。難題ではあるが、残さなければ、と思っている。（日田市昭和学園高校理事長）